

「メディア人間」の集合的無思想に挑む雑誌研究

佐藤 卓己

1 メディア史における「メディア」

メディアを辞書的に定義すれば「出来事に意味を付与し体験を知識に変換する記号の伝達媒体」である。だが、マス・メディアという言葉は「広告媒体」の意味で一九二〇年代のアメリカで使われはじめた新語である。日本でも外来語「メディア」はまず広告業界や学術雑誌で戦後使われるようになり、消費社会化の進展とともに一九八〇年代になって新聞やテレビでも普通に使われるようになった。それ以後、マス・コミュニケーションの担い手としてのメディア media は日常生活に不可欠な存在となっ

た。そのため「メディアとは何か」が厳密に議論されることは少なかった。それだけの理由ではないが、メディアが「中間」「媒介」を意味するミディウム medium の複数形であることさえ知らない大学生は今も少なくない。『オックスフォード英語辞典』OEDは、mass mediumの初出として一九二三年アメリカの広告業界誌『広告と販売』Advertising & Sellingの用例を挙げている。それは集合的に「新聞、雑誌、ラジオ」を示しており、やがて複数形「メディア」で人口に膾炙された。そのため「伝達」媒体であっても、「広告」媒体ではない手紙、歌謡、電話はもちろん、書籍、レコード、写真も長らく「メディア」と意識されることはなかった。

このメディアはミデイウムの本質において「中間的」である。特に雑誌は店頭販売されることが多い書物と定期購読される新聞の間にある活字商品として「中間性」が突出している。また、「公共性」の名において現在まで規制が多い放送、戦時体制下で国家権力により一県一紙体制に統合された新聞と比較すれば、雑誌は法的な規制の比較的小ないメディアである。例えば、免許制であるテレビ放送には免許条件として三〇%以上の教育・教養番組が義務づけられており（拙著『テレビ的教養』NTT出版を参照）、民放連の放送基準でも「CM放送の時間枠が一週間の一八%を超えない」という自主規制が存在する。こうした規制は雑誌に存在しない。また、第三種郵便物認可をうけるため広告量を五〇%以下に押さえることが絶対条件となる新聞に比べて、店頭販売が多い一般雑誌で広告量の抑制が意識されることは少ない。そのため、雑誌こそが「広告媒体」の純粹形態をとどめたメディアとも言える。

また新聞史において、雑誌は定期刊行物 *periodical* として新聞と連続的に扱われてきた。新聞メディアの総称は、イギリスの場合、一七世紀初頭に出来事やスキヤンダルを印刷した *Relation* 期に始まり、不定期だが連続的に発行された *Pillar Courant* 期、毎週定期的に発行された *Panff* *Journal* 期、冊子形式の最後段階である *Mercurius*

期を経て、一九世紀中頃に雑誌形式と一応区別できる新聞紙 *Newspaper* のスタイルが成立した。つまり、新聞と雑誌が形式で一応区別できるようになったのは、一九世紀に入ってからのことである。広告欄が常設化されるのも「ジャーナル」期であり、その意味で「新聞」の広告媒体化、すなわちメディア化も「雑誌」に胚胎する。

2 現代メディア史における「雑誌」

二〇世紀のメディア状況では、雑誌は時間的な拘束性あるいは耐久性において書物と新聞の中間にある。ストックされる書物は時間に耐えて古典となる可能性もあるが、新聞はもっぱら発行日に読まれるフローな情報媒体である。

こうした中間性ゆえに、メディア統制法である「出版法」（一八九三―一九四九年）と「新聞紙法」（一九〇九―一九四九年）が存在した戦前でも「雑誌法」は存在せず、「新聞紙法の雑誌」と「出版法の雑誌」とで扱いが異なっていた。つまり、政治・経済ニュースを扱わない学術雑誌や文芸雑誌は出版法の下で発行された。たとえば、一九二三年菊池寛が文芸雑誌として創刊した『文藝春秋』は、一九二六年に時事的内容も扱うべく出版法から新聞紙法に登録変更している。こうした例は珍しくなく、右翼雑誌『原理日本』

も歌学雑誌から思想戦雑誌へと進化する過程で、一九二八年に新聞紙法の雑誌となつてゐる。

とはいえ、思想的に見れば、文学も歌学も十分に政治的であり、その内容から出版法か新聞紙法かを区別することは不可能である。それゆえに、「内容」より「形式」に着目するメディア史のアプローチが有効だと言えるわけである。実際、情報流通の加速化により月刊「雑誌」から日刊「新聞」が分化するプロセスにおいて、発行間隔が比較的長い雑誌は、新聞よりも長時間の流通に耐えうる編集製本がほどこされていった。日刊の新聞では刻々のニュースを速報することに主眼を置くため、ニュースの背景や将来の展開などを含む解説まで十分に目配りすることは難しい。新聞よりも時間的に幅のある雑誌が論説を得意とするのはそのためである。思想史の素材として新聞より雑誌が好まれたのもそのためだろう。

ただし、形式的には「月刊雑誌」が発行間隔を短縮した「日刊雑誌」を生む実例も存在する。たとえば、現在も発行されている『日刊ゲンダイ』である。『夕刊フジ』と並んで、キオスクなどで売られている代表的な夕刊紙だが、『日刊ゲンダイ』は新聞『夕刊フジ』と異なり雑誌である。後者は産経新聞社が発行する夕刊新聞だが、前者は講談社系（音羽グループ）の株式会社・日刊現代が発行する日刊雑

誌であり、月刊誌『現代』（一九二〇年創刊）―『週刊現代』（一九五九年創刊）の流れを受けて一九七五年に創刊された。この「夕刊雑誌」は日本新聞協会に加盟しておらず、雑誌扱いで流通している。同じように、書籍と雑誌の区別も実は曖昧であり、コミックス（マンガ本）の大半には雑誌コードが付けられており、流通上は雑誌扱いとなっている。

3 メディア史と思想史

思想研究においても、ふさわしい資料はストックされてきた。そもそも新聞が長らく学問研究の素材と考えられなかったために、二〇世紀初頭のドイツの大学で新たに新聞学 *Zeitungswissenschaft*（現・コミュニケーション学）が成立したのである。この新興科学が戦前の日本で「まともな学問」と考えられなかったことは、一九二七年の東京帝国大学文学部教授会における「新聞学講座」新設案の否決からも明らかである。戦後、東京大学新聞研究所（現・情報学環）の初代所長に就任する小野秀雄は、一九二七年寄附発起人総代・渋沢栄一、貴族院議員・阪谷芳郎、大阪毎日新聞社主・本山彦一など政財界の支援者を集め、東京帝国大学に新聞学講座を開設する準備を整えた。しかし、文学部

教授会は「新聞学なるものの学問としての性格」を理由に新講座の設置を大差で否決した。明確な支持者は国史学・三上参次、宗教学・姉崎正治、社会学・戸田貞三の三教授のみだったことを、小野秀雄は『新聞研究五十年』（毎日新聞社・一九七一年）で書き残している。その後の総力戦体制下に、ドイツ新聞学を含むマス・コミュニケーション研究は、宣伝効果分析の必要性を強調して大学で制度化されていった。

私は東京大学新聞研究所の最後の助手の一人で、修士論文はドイツ社会民主党の風刺漫画雑誌研究だった。その意味ではドイツ新聞学、あるいは小野秀雄の系譜に連なっている。私が専門を「メディア史」を名乗るようになったのは、博士論文『増補・大衆宣伝の神話——マルクスからヒトラーへのメディア史』（現・ちくま学芸文庫）を執筆した後、「思想史の屑籠からかき集めた史料」で新たなナチズム史を描いたジョージ・L・モッセの『国民の大衆化』（柏書房・一九九四年）を翻訳したことを契機としている。

私の雑誌研究は『キング』の時代——国民大衆雑誌の公共性』（岩波書店・二〇〇二年）から『凶書』のメディア史——教養主義の広報戦略』（岩波書店・二〇一五年）までであるが、主に二〇世紀の雑誌を対象としてきた。こうした雑誌研究において感じたことは、メディア史的アプローチ

と思想的アプローチの違いである。雑誌の思想史研究は、メディア史よりもジャーナリズム史に近いように思える。すでに述べたように、メディアが第一義的に「広告媒体」であると考えるならば、複数のメディアでその影響を比較検討するメディア論の問いは「その形式は効果的か」と定式化できる。こうしたメディア論が学問的であろうとすれば、時間的射程の長いメディア史研究たらざるをえない。新しいメディアの文法は既存のメディア環境において編成されるからである。

一方で、ジャーナリズム史は多くの場合、思想家でもあるジャーナリスト（カール・マルクスしかり、本シンポジウムで中野目報告が扱う三宅雪嶺しかり）の思想研究と不可分である。ジャーナリズム史の問いを「その内容は真か偽か」と定式化できるとすれば、思想史のそれは「その思想は真か偽か」となるだろう。その上で、メディア史が比較メディアウム史であるとすれば、思想史は比較思想家史と言えるのかもしれない。マス・オーディエンスへの影響や効果を考量するメディア史においては、極端に言えば、内容の真偽はどうでもよい。つまり、思想史の研究対象が輿論（公的意見 public opinion）であるとすれば、メディア史のそれは世論（世間の雰囲気 popular sentiments）であると見なしでもよいだろう（輿論と世論の区別については、拙著『輿論と世論——

日本型民意の系譜学」新潮選書を参照)。中野目報告が扱う三宅雪嶺が輿論のジャーナリストであるとすれば、三宅の論説を毎号巻頭に掲げた『実業之世界』『帝都日日新聞』の発行者・野依秀市(一八八五—一九六八年)は「集合的無思想」、すなわち世論のメディア人間と言える。

4 野依秀市という反思想的人間

野依秀市(秀一は一八九九年一月までのペンネーム)と同年に生まれた出版人には、正力松太郎(読売新聞社主)、山本実彦(改造社社長)がおり、二年後の一八八七年生まれに石川武美(主婦の友社社長)、嶋中雄作(中央公論社社長)が続いている。新聞雑誌界の今日ある姿を創った世代の一人と言つてまちがいではない。だが、メディア文化史、あるいは思想史の著作において、野依秀市という名前を目にする機会はまだであった。それでも、坪内祐三は「露伴、雪嶺に愛された騒動男」(20世紀ニッポン異能・偉才100人)朝日新聞社・一九九三年)、大澤正道は「反権力を売り物にした異色の出版人」(日本アナキズム運動人名事典)ばる出版、二〇〇四年)、松尾尊発は「反骨の国権的自由主義者」(わが近代日本人物誌)岩波書店・二〇一〇年)と野依を評しており、まったく忘れられた人物でもない。拙著『天下無敵のメディア

人間——喧嘩ジャーナリスト・野依秀市」(新潮選書・二〇一二年)以前の最も詳細な評伝は、野依の元秘書だった梅原正紀の「野依秀市の混沌」(ドキュメント日本人9 虚人列伝)学芸書林・一九六九年)だが、その文章は「国士まがいのユスリ・タカリ屋としての悪名が広く世間に流布されている」と始まっている。ちなみに、梅原の父・梅原北明も『変態資料』『グロテスク』などを刊行した戦前エロ出版界の巨人として有名である。

もちろん、野依を「右翼ジャーナリスト」として立項する人名辞典は存在する。たとえば、『現代人物事典』(朝日新聞社・一九七七年)で判沢弘はこう書いている。

一八八五(明治一八)年七月一九日大分県中津市生まれ。一九六八年三月三一日死去。小学校卒業後上京、慶応義塾の商業夜学校に学ぶ。在学中、友人石山賢吉(のちダイヤモンド社を創立)の協力を得て『三田商業界』(のち『実業之世界』と改題)を発刊、三宅雪嶺、渋沢栄一らの庇護をうけた。東京電燈の料金値下げ問題などからむ恐喝などで二回の入獄後、浄土真宗に帰依、二一年『真宗の世界』を創刊、三二年大分一区より代議士に当選。同年『帝都日日新聞』を創刊し社長となったが、四四年東条内閣攻撃のため、四五回の発売禁止処分をうけたのち廃刊。戦後は公職追

放を受け、解除後は、五五年衆議院議員（日本民主党）となり、保守合同に活躍。五八年の総選挙では落選。また『帝都日日新聞』を復刊（五八年）、とくに、深沢七郎の『風流夢譚』問題をめぐり、中央公論社を激しく攻撃し、また紀元節復活法制化運動の先頭に立ったことで知られた。著書多数。全集がある。（強調は引用者）

これを判沢が執筆する際、追悼本『野依秀市』（実業の世界社・一九六九年）の年譜を下敷きにしたことは「四四年東条内閣攻撃のため、四五回の発売禁止処分」など引用データから見てもまちがいない。反共色を強調した野依晩年の自筆年譜に依拠する限り、「右翼ジャーナリスト」という評価も間違いではない。しかし、このレットテルには大きな落とし穴がある。つまり、明治リベラリズムから昭和ナショナリズムへ走った言論人という思想史の枠組みに野依を無理に押し込めてしまうと、その言論活動の本質は見えてこない。例えば、この「戦後的」略歴を戦前刊行の事典記述と引き比べてみればよい。判沢の略歴で大正期はわずか三行の強調部だけが、洪沢栄一・三宅雄二郎・鎌田栄吉監修『明治大正史 人物篇』（実業の世界社・一九三〇年）の「野依秀市」は大正期自由主義者としての活動が詳しく記述されている。

大正元年十二月、二年の刑に処せられ服役す。此間保釈所を許さるゝや法、農学博士新渡戸稲造を筆誅し、『青年の敵』を著す。時に堺利彦、荒畑寒村、故大杉栄と知り親交を結ぶ。為に後社会主義者と曲解するもの無きに非ざるも、君が熱誠なる皇室中心主義は終始変わらず。同三年三月仮出獄の恩典に浴し、帰來『監獄は人世の大学也』の論文を誌上に発表し稜々不屈の氣骨を示す。同年八月悪徳保險会社の筆誅を重ねて官憲の忌諱に触れ、同五年五月四年の刑に服し再び囹圄の身となりしも、入獄までの間に台湾を視察し、又『世の中』『女の世界』『探偵雑誌』等を發刊し斯界の尖端を切る。大正九年五月獄中に真宗信仰の真髓を体得し、出所後大いに同宗の宣伝に努む。翌十年五月『野依雑誌』を創刊し縦横経綸の筆を執りて輿論に資す。同年九月「大日本真宗宣伝協会」を起して『真宗の世界』を發刊し、翌十二年全国宣伝行脚の途に就きたるも、偶々関東大震災に會して本社を大阪に移し、大活躍を為す。後本社を東京に還して捲土重来、翌十三年一月清浦内閣の成立に反対し其打倒を期し、全国の大新聞に半頁大の「清浦内閣倒壊」の広告を為し世人を驚かす。次で同年衆議院議員改選に際し郷里大分県より立候補し、元田肇と戦ひしも不利に終る。翌十四

年八月欧米視察を兼ね真宗海外宣伝の途に就く。帰途シベリヤに於て奇禍に遭ひ、チタ未決監に拘留十日に及び、翌十五年六月帰朝す。同年更に「仏教思想普及協会」を起し『仏教思想』を創刊し、其普及協会を設立す。茲に真宗信仰及仏教思想の宣伝普及に万全を期せり。

社会主義者との交流では、片山潜が一九一四年アメリカに亡命する際にも野依は旅費をカンパしており、一九二六年外遊中のモスクワでコミンテルン幹部の片山潜と再会し、ソビエトから送られてくる片山論文を『実業之世界』に掲載し続けた。野依の行動を「右翼」はもちろん、「自由主義」や、「アナーキズム」という思想史の言葉で説明することは難しい。

5 メディア史上の野依秀市

私をはじめ「野依秀市」という名前に出くわしたのは、『キング』の時代（二〇〇二年）の執筆中だった。日本初の百万部雑誌『キング』を創刊した大日本雄弁会講談社社長・野間清治の伝記を調べているとき、野間を厳しく糾弾する芝野山人『積悪の雑誌王——野間清治の半生』（芝園書房・一九三六年）を手にした。芝園書房は野依が経営する出

版社の一つで、その内容も『実業之世界』掲載の講談社糾弾キャンペーンを集大成したものだ。野依と親交があった徳田球一も野間批判に協力しているが、野依は自作年譜でこれを自著に数えている。

ついで私は『言論統制』（中公新書・二〇〇四年）で、講談社に戦争協力を強要した張本人と社史が名指しする情報官・鈴木庫三の足跡をたどった。その際、敗戦を挟んだ言論界の動きを検証し、石川達三の小説『風にそよぐ葦』（毎日新聞社・一九五〇年）が「言論ファッショ化の元凶」鈴木少佐の悪名を確立させたことを知った。戦時中は文学報国会実践部長だった石川達三自身の戦争協力を調べる過程で、野依秀市『石川達三と対決』（実業之世界社・一九五九年）に出くわした。石川をはじめ多くの文筆家が敗戦後に軍部に責任転嫁するなかで、戦時中「米本土空襲」運動を展開した野依は毅然としてこう言い放った。自分は戦争犯罪人ではないが戦争張本人である、と。日本出版協会における「戦犯出版社」追放事件を論じた宮守正雄『ひとつの出版・文化界史話』（中央大学出版部・一九七〇年）によれば、出版界粛清委員会での野依はまさしく「天下無敵」だった。講談社、旺文社、主婦之友社、家の光協会など「戦犯七社」に続き、第二次戦犯追及として一九四六年三月新潮社、博文館などとともに秀文閣書房（実業之世界社）の野依

も召喚された。

「天下無敵」と異名をとる野依秀市は、部屋に入ってくるなり、委員たちの前で大アグラをかいた。そしてタンカを切ったのである。「大体、てめえー達は、俺を呼びつけて裁判みたような真似をしゃがるが、いたい何んの権利があつてやるんだ。俺は裸一貫数十年間やってきた男だ。戦犯だなんだというが、戦争中、アメリカと戦え、というのは当り前じゃねえか、てめえー達の決定、なんか、ご尤もでございますと、この俺が服せると思ふか」と、委員一同をハッタとにらみつけたのである。

一九四七年七月二〇日、野依は公職追放令のG項該当者に指名されているが、たんなるワン・オブ・ゼムではない。アメリカ占領軍が「宣伝用刊行物」として没収した戦前図書七一九点中、個人別リストで第一位は野依の二三冊だった。ちなみに、著名作家では徳富蘇峰が一四冊で六位、軍事評論家・池崎忠孝や元国民精神文化研究所員・藤沢親雄が一冊二〇位である（占領史研究会編『総目録GHQに没収された本』サワズ出版・二〇〇五年）。

さらに私は『八月十五日の神話』（二〇〇五年・現・ちくま学芸文庫）で祝祭日・記念日の成立過程を調べているとき、紀元節復活法制化国民運動の指導者として野依秀市の名に

出会った。しかし、その活動は意外な人物の著作と繋がっていた。一九五六年、野依は自ら推薦の序文を付して、戦前は禁書だった幸徳秋水『基督抹殺論』（一九五六年）を公刊している。キリスト生誕に基づく西暦の神話性を暴露することで、逆に日本神話と元号の正統性を示そうというのである。その序文によると大逆事件前から幸徳と野依は面識があり、しかも幸徳が刑死する直前、市ヶ谷未決監で二人は会話していた。また、『基督抹殺論』に卷末解説を書く予定だった堺利彦にとって、野依は売文社最大のお得意さんであり、野依の実業之世界社で「冬の時代」を過ごした社会主義者は荒畑寒村ほか多数に及んだ。

この自称「時流の反抗者」の著作を私が本格的に蒐集しはじめたのは、竹内洋との共編著『日本主義的教養の時代』（柏書房・二〇〇六年）の執筆時からである。そこでは原理日本社系の新聞人・高杉京演が発行した新聞内報『新聞と社会』を分析したが、高杉が別に経営した夕刊帝國社こそ『言論ギヤング——野依秀市の正体』（一九三三年）の発行元である。そこで『帝都日日新聞』は偽装共産党の機関紙として糾弾されていた。つまり、野依は右翼から「言論ギヤング」として攻撃されていたのである。

一方、「天皇中心主義者」野依は朝日新聞筆詰キャンペーンをまとめた『国賊東京大阪朝日新聞膺懲論』（一九

二八年)で、朝日新聞の「議會中心主義」を厳しく糾弾している。松尾尊兌が「野依秀一(のちの反共主義者秀市)」と表記したように、思想的には野依の思想的分岐点を本名に戻った一九二九年あたりに置くのが妥当かもしれない。しかし、翌一九三〇年に野依が自ら編集した『マルクス主義十八講』では、冷静な現状認識に立つて社会主義に関する知識の必要性を訴えている。こうした著作の「内容」を見る限り、野依の言論活動はまさに混沌たる状況を呈している。

6 ジャーナリズム思想史ではないメディア史

このような混沌たる言論人にオーソドックスな思想史のアプローチは有効だろうか。一般に言論人の文章とその人格は同一視されることが多い。言論人の思想的考察とは、著作物から著者の個性、すなわちオリジナリテイ(獨創性)を読み取ることだろう。しかし、野依の著作を読むことで、本当に野依の思想がわかるかどうか。戦前に出版された野依著作の巻末には、しばしば「野依秀市著作年表」が付けられていた。『戦争と選挙』(一九四二年)のリストでは、『傍若無人論』(一九〇九年)から最近著『浄土真宗の根本特色』(一九四二年)まで九七冊が挙げられている。さらに敗

戦までに『米本土空襲』、『勝ち抜く国民政治』、『日米決戦必勝論』、『日本人戦力論』など一冊が確認できるので、戦中までの「自認」著作は一〇八冊となる。しかし、ここには処女作『快気焰』(一九〇八年)や「不屈生」名義の『苦学の実験』(一九二二年)など初期編著、あるいは前出の『積悪の雑誌王』など変名著作、さらに宣伝用の非売品冊子が含まれていない。追悼文集の年譜で確認できる戦後著作八九冊を加えると、その生涯で優に二百冊以上の「自著」を出版したことになる。

この膨大な野依コレクションをほぼ揃えた上で書くのはいかにも虚しいが、どこまで野依自身の言説なのかを判断としないのである。堺利彦『売文集』(丙午出版社・一九二一年)に寄せた野依の序文で、野依自身が「僕は売文社の定得意になつて居る」と社会主義者の代作を告白している。

僕は無学不文であるが故に、僕の意見は是まで大抵人に話して書いて貰つた。先には多く白柳秀湖君に書いて貰つた。白柳君は実に善く僕の意を尽して呉れた。

然るに昨年監獄から出て暫く加藤病院に居た時、加藤〔時次郎〕院長の紹介で偶然堺君に会つた。其時堺君は売文社を起して居た。僕は早速堺君に頼んで僕の新渡戸博士攻撃の文を書いて貰つた。すると其文が非常に僕の気に入つた。

これほどはつきり代作を公言し、それを正当化する言論人はめずらしい。しかも驚くべきことに、この告白文も堺利彦の代筆なのである。つまり、野依の著作は今日のタレント本がそうであるように代作者によって書かれたものといえなくもない。野依秀市を「言論人」ではなく「メディア人間」として研究する必要性はここにある。「メディア人間」とは自分自身を広告媒体と強烈に意識した宣伝的人間である。広告媒体にとつて、伝達する「内容」は「媒体そのもの」の価値、つまりそれが知名度を高めるかどうかで評価された。こうした「メディア人間」の発言内容は真偽よりも、発言する媒体（著者）の効果が圧倒的に重要だった。その発話において内容が二の次である以上、その著作の「本当の筆者」を探すこともほとんど意味はないだろう。

おわりに——「負け組メディア研究」の射程

こうした「メディア人間」野依秀市の特異性をいち早く見抜いていたのは、大宅壮一である。大宅はレーニンの帝國主義論をもじって野依の言論活動を「ジャーナリズム最後の段階としての野依イズム」と呼んでいる。「現在何百と出ている経済雑誌の経営者、編集者の中で、野依大学」

出身者は圧倒的である」と評した大宅は、野依を「総会屋的」ジャーナリズムの元祖として位置づけた。野依自身も戦後の回想「わが半生を語る」（『実業之世界』一九五四年一月号）でこう書いている。

野依学校の卒業生とか、又野依学校の生徒だというやうな言葉もある。……凡そ野依学校に籍をおいたものが、二百人位はあつたろう。

野依ジャーナリズムの実態は、メディア業界のビジネス・スクールだったといえるかもしれない。

こうした「野依秀市」研究は、これまで一流雑誌、全国紙の視点で書かれてきた明治・大正・昭和のメディア史を、「取り屋ジャーナリズム」と目されてきた『実業之世界』、『二流新聞』『帝都日日新聞』など野依メディアから逆照することによって相対化することを目的としている。また、「メディア人間」という補助線を引くことで、左翼／右翼、革新／保守というジャーナリズム史の枠組みを脱することもできるだろう。さらに言えば、そうした「負け組」メディアの歴史を書く作業こそが、言論空間を支配した主流メディアの影響力を再確認し、メディアの権力性を明らかにすることになると私は考えている。